

# なぜ、神が「父」と呼ばれるのか

ヘブル語の「父」(アーヴ)の秘密

## ベレーシート

●イエシュアが弟子たちにこのように祈りなさい(ギリシア語原文では「祈り続けなさい」—現在形・中態の命令)と言って教えられた「主の祈り」、その祈りの最初の呼びかけは「天にいます私たちの父」です。福音書の中に、イエシュアが「わたしの父」という表現で語っているその数は36回あります。マタイでは12回、ルカは3回、ヨハネでは21回です(マルコにはこの表現がありません)。

●今回は、特に、「天にいますわたしの父」という呼びかけに注目します。つまり、なぜ「父」なのか、なぜ神が「父」と呼ばれるか、この呼びかけをヘブル的視点からミドゥラーシュしたいと思います。つまり、「父」というヘブル語「アーヴ」(אב)に集中したいと思います。

## 1. ヘブル語の「アーヴ」に隠された秘密

●「天」と「父」ということばに対応していることばは、「地」と「子」です。「地」と「子」を意味する語彙がなくとも、「天」と「父」という語彙の中に、「地」と「子」が示唆されています。地のない天はなく、子のない父はあり得ないからです。したがって、「天にいますわたしの父」という呼びかけは、本来、天におられた方が、父によって天から地に遣わされた子、すなわち「子」であるイエシュアが祈り続けていた祈りだと言えます。そして、「子」であるイエシュアが祈っているその祈りの中に、神ご自身のいっさいのもの(創造とその目的、救いとそのご計画)が秘められていると信じます。

●なぜ、イエシュアは「神」を「父」と呼んだのか。ヘブル語で「父」は「アーヴ」(אב)です(ちなみに、アラム語では「アヴ」(אב)です)。「わたしの父」は「アーヴィ」(אבִי)、「私たちの父」は「アーヴィーヌー」(אבֵינו)となりますが、なぜ神が「父」(アーヴ)として表わされるのでしょうか。その秘密は、ヘブル文字の中に隠されています。

●「アーレフ」(א)と「バート」(ב)の二つの文字が組み合わされているヘブル語の「父」(アーヴ אב)に秘密があるように思います。それはどういうことかと言えば、この二つはヘブル語の「アーレフ・バート」の最初と次に来る文字です。「アーレフ」は「牛」の意味で「力」を表わします。また、「すべての事柄の本源」とも言えます。「アーレフ」は目には見えない本源の実体であり、何らかの媒体がなければその存在を見ることのできない力ある実体です。そのことが「バート」の文字を必要としているように思います。



●「バート」の文字は「家」(בית)の頭文字を表わしますが、同時に、この文字は「子」を意味する「バーン」

(בְּנֵי),あるいは「息子」を意味する「バール」(בַּר)の頭文字です。「長子」もヘブル語では「ベホール」(בְּכוֹר)です。つまり、本源である父「アーヴ」(אָב)は「子」「息子」「長子」によって、また「家」において、はじめてその実体を現わされる方であると言えます。

●さらに興味深いことには、「ベート」の文字(ב)が前置詞(בְּ)で用いられると、「(はじめ)に」「~によって」「~と共に」というように、時やかかわりの方法や共働者を意味します。しかもそこにはゆるぎない「信頼」が存在しています。そしてこの「信頼」を意味する動詞が「バータハ」(בָּטַח)で、名詞は「ベタハ」(בֵּטַח)です。なんとすべてにおいてベートの文字(ב)があります。

●使徒ヨハネは、御子イエシュアのことを「ことば」(ロゴス)という概念で表わしました。そして「ことばは神とともにあった」と記しています(ヨハネの福音書 1:1)。ここの「ともに」という表現にはギリシア語の前置詞「プロス」(πρός)が使われており、それは「互いに向かい合っている信頼の関係」を表わしています。そして、ヨハネ 1 章 18 節では、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」とも表現しています。だれも見たことのない神を、父の秘密を知っておられる御子が、人となって来られ(「ポー」בּוֹא)て、私たちの間(中)に(「ベーン」בֵּינָם)生まれ、御父のみこころを語り、そしてご計画を成し遂げられました。そのことを正しく知ることが聖書の教える「悟り」(「ビーナー」בִּינָה)です。  
※ここに使われているヘブル語の頭文字がすべて(ב)であることに注目する必要があります。

## 2. 「御父」と「御子」のかかわり

### (1) 家を建てる「御父」と「御子」

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים

●聖書の出だしは、上記にあるように、「ベレーシート・バーラー・エローヒーム」です。旧約聖書には「アルファベット詩篇」というすぐれた語法があるにもかかわらず、なぜ、聖書は「アーレフ」でなく、「ベート」の文字から始まっているのでしょうか。それは決して偶然ではなく、奥義です。天と地の創造は、「アーレフ」(א)によって信任された「ベーン」、すなわち、御子によってなされたからです。御子が天にある「家」(ベート)を地にまで広げられ、天地という「家」を創造されたのです。天の父は御子にすべての権限を託して、天と地の創造をまかせました。ちなみに、「創造する」と訳された「バーラー」(בָּרָא)は、例外もありますが、ほとんど神にしか使われない動詞です。このことばも(ב)から始まる単語です。

【新改訳改訂第3版】コロサイ書 1 章 16~18 節

- 16 万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
- 17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。
- 18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

●興味深いことに、ヘブル語の「創造する」という動詞の「バーラー」(בָּרָא)が、息子である「バル」(בֶּן)によってなされたことを示しています。というのは、この二つの言葉は密接な関係にあるからです。

●このように「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合って存在しているのです。御父は、御子によって世界を創りました。天と地における「万物」「見えるものも見えないものも」「天と地にあるすべて」、それらは御子によって存在している「ひとつの家」なのです。その家の中に、神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、御国、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のわざをゆだねられた御子によってなされます。

●そのような御子が、12歳になられたとき(※脚注)、巡礼先のエルサレムで両親とはぐれてしまいました。はぐれたといっても、イエシュアはそのままエルサレムに残り、宮の中で律法の教師たちと問答しておられたのですが、迷子になってしまったと思った両親は心配して捜し回り、三日後、エルサレムに引き返して、宮の中にいるイエシュアを見つけました。そんな両親に対してイエシュアはこう言いました。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしは必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」(ルカ 2:49)と。両親ともこのイエシュアの言ったことばが理解できなかったようです。天から遣わされた御子イエシュアは地上においても父の家にはいたのです。

●御子イエシュアこそ、天地を創造し、地上に人(男と女)を造ることによって、天にある本体の写しを造られました。創造当初、天と地は一つであったのです。墮罪によって天と地を一つにしている「エハード」(אֶחָד)は破られてしまいました。そのために、神は回復のためのご計画を立てられました。その目的は、再び、天にあるものと地にあるものすべてを、イエシュア・ハマシーアツハ(イエス・キリスト)によって一つ(「エハード」אֶחָד)にすることでした(エペソ 1:10)。

【新改訳改訂第3版】エペソ書 1章 10節

時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方にあって、一つに集められるのです。

●「バート」が意味する「家」という概念には、地上にある「神の家」「神の子孫」「主の幕屋」「主の宮」「神殿」「主にある私たちの体」「主の民」「イスラエル」のすべてが含まれ、それらは天にある「家」の写しと言えます。その「家」に住むことが救いであり、救われて神の子となった者はみな神の家における特権と祝福を味わうことが出来るのです。これらすべては、父が「アーヴ」(אָב)であることに秘められているのです。御子イエシュアが遣わされたこの地上で、天におられる方に向かって「父よ」と呼びかけているのは、そこに壮大な神の使命があり、父と子の住む家と地の家との回復のご計画が隠されているからです。使徒パウロはこのプロセスを「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至る」と表現しています(ローマ 11:36)。

## (2) 家を建てる「御父と御子」の写しとしてのモデル

●天における「御父」と「御子」の信頼のかかわりとそのみこころを、私たちは地上の御子イエシュアを通して

見ることができるのです。そうしたかかわりを地上で写し出された他の例として、アブラハムとイサク、またダビデとソロモンを挙げることができます。アブラハムとイサク、ダビデとソロモンに見られる「父と子」のかかわりは、御父と御子のかかわりの型(写し)です。以下に、そのことを簡単に触れてみたいと思います。

### 例 1—「アブラハムとイサク」

創世記 22 章 6 節と 8 節には、「ふたりはいっしょに進んでいった」(6 節)、「ふたりはいっしょに歩き続けた」(8 節)とあります(原文ではいずれも同じ表現ですが、訳文では変わっています)。父と子のふたりは常にいっしょに歩き続けた(ハーラフ)ことが強調されています。父と子がゆるぎない信頼で結ばれています。父アブラハムの神への信頼、子であるイサクの父アブラハムに対する信頼がテストされた出来事が 22 章でした。父アブラハムは、約束された子イサクにすべてを与え、子であるイサクは父アブラハムからすべて(家長の権威、家の財産、神の約束のすべてを)を受けています。ここには「天における御父と御子の麗しい信頼の写し」があります。

### 例 2—「ダビデとソロモン」

ダビデの「主の家(宮)を建てたい」という強い思いは、子ソロモンによって実現します。I 歴代誌 22 章 5 節にはダビデが子ソロモンに語ったことばが記されています。

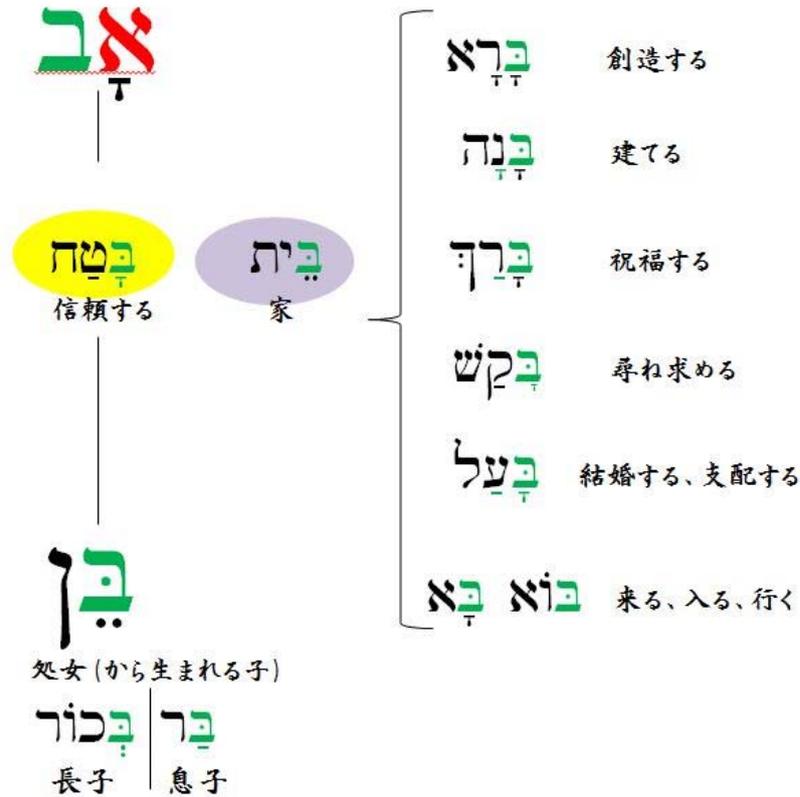
5 ダビデは言った。

「わが子ソロモンは、まだ若く力もない。【主】のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない。それで私は、そのために用意しておく。」

●家(ベト)において、父は家のリーダーであり、力と知恵をもって子を導き、教え、その子孫を継続させていく責任を担った存在です。父は子に対しての大きな責任をゆだねられています。子は父に従順であることによって、はじめて「家」は建て上がって行きます。父と子が共に「家」を建てるということは、天における真理なのです。そこに私たちが招かれています。

●ダビデの主のために宮を建てたいという思いが先行し、その思いがソロモンによって実現することとは別に、神である主とダビデが交わした「ダビデ契約」というものがあります。それは無条件的契約で、「主がダビデのために一つの家を建てる」という約束です。ソロモンにゆだねられた主の宮は、やがてソロモンの罪によって二つに分裂して、やがて崩壊します(バビロン捕囚の出来事)。しかし一度、主がダビデに約束された「一つの家を建てる」という約束は、ダビデの子孫から登場するメシアによって実現します。それは未だ実現してはいませんが、必ず、ダビデ的王国がメシアによって実現する時が到来するのです。それは「千年王国」の到来です。エルサレムを中心として、メシアであるイエシュアが全世界を王として統治する時代が、メシアの地上再臨によって実現します。

## 3. 「父」と「子」のかかわりを示すヘブル語の語彙



### 「ベート」の文字で始まる語彙によるストーリー

●父「アーヴ」(אב)は、長子「ベホール」(בכור)である子「ベーン」(בן)、ないし息子「バル」(בר)を信頼して(「バータハ」בטח)、家(「ベート」בית)を建てさせました(「バーナー」בנה)。すべての者が、処女(「ベトラー」בתולה)マリヤから生まれた子(「ベーン」(בן)を尋ね求める(「バーカシュ」בקש)なら、その息子(「バル」בר)を通して、家(「ベート」בית)の中に入る(「ボー」בוא)ことができるのです。そして主は、私たちに油を注いで(「バーラル」בלל)下さいます。その油は神の歓迎の喜びとしての油です。またそれは、主を知るための主からの祝福(「ベラーハー」ברכה)のしるしです。私たちはこの良い知らせを伝える(「バーサル」בשר)という責任があります。やがて、花婿なるキリストは結婚する(「バーアル」בעל)ために、花嫁なる私たち(教会)を迎えに来て(「ボー」בוא)くださいます。なぜなら、主はアブラハムやダビデと結んだ契約(「ベリート」ברית)を必ず果たされる方だからです。

### まとめ

●「主の祈り」の最初の呼びかけである「父」という言葉の背景に、「父」を呼ぶ「子」の姿があります。「父」は絶対的信頼をもって「子」に全権をゆだね、ご自身のみこころを成し遂げられます。一方「子」も十字架の死に至るまで、「父」に対する絶対的信頼を貫くことによって敵の最後の砦である死の力が打ち破られました。そして天と地は修復されてひとつ(「エハード」אחד)となります。なんという「父と子」の永遠の愛の絆でしょうか。「父」と「子」のゆるぎない信頼が、この「主の祈り」の最初の呼びかけの中にあるのです。